

## 紀伊大島3集落のライフサイクル変容と集落の持続性

—傾斜環境における住空間変容の研究— その1

ライフサイクル 集落 コーホート  
すまい Uターン 少子高齢

正会員 ○ 平田 隆行 \*1  
本多 友常 \*2  
水野 美由紀 \*3  
門永 琢 \*4

### ■研究の目的

本研究は紀伊大島3集落における住居変容と集落の持続性について、物的側面からだけでなく、社会的な側面からその現象を読み解き、住居変容の要因を検討していこうとするものである。形態だけではなく、住まい手が持っている個別の事情や、社会背景、家族のあり方といった社会的な動向をふまえたうえで、どのように住居がすまわれているのか、どのように世代交代を経て持続していくのかを考察する。

### ■研究の方法

本研究は2000年度より断続的に行われ、これまでに平面採取、住居の類型化を行い、さらに地形や風土との関係が明らかになっている。今回は平面図のある大島3集落計40世帯にたいして再度戸別訪問ヒアリングを行い、住居の変遷（使われ方、家具配置のプロット図、増改築遍歴）、家族の変遷（世帯夫婦の結婚・出産・子供の独立などのイベント、夫婦世帯の居住歴や近居・遠居ネットワークの有無、里帰りの実態）の2点についてヒアリングを行った。このヒアリングをもとにイベント年齢比較法を用いたライフサイクル表を作成し、住居のメンテナンスサイクルとすみ手のライフサイクルとの関係を分析している。

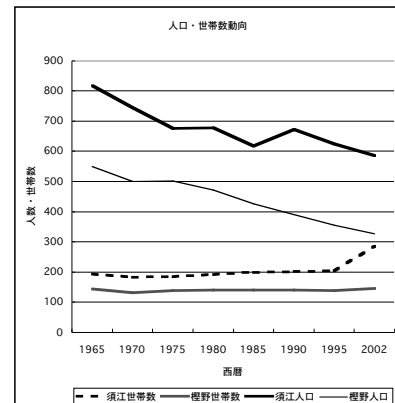
### ■調査地の概況

対象となった紀伊大島は本州最南端、紀伊半島の南端に位置し、和歌山県で唯一人が定住している離島である。古くから交易船舶の中継港として栄えた大島集落、自律的な半農半漁の漁村集落として発展した須江・樫野の3集落が点在している。内外の航路が集中する場所柄から諸外国との接触が多々あり、明治から昭和中期にかけてはブラジル・オーストラリアへの移民を数多く排出するなど、地に足のついた海外交流をおこなってきた経験を持つ。1999年には「くしもと大橋」の開通により本土と地続きになり、島外からの観光客が増えつつあるが、島内ではサービスの広域化にともなう交通弱者が新たな問題として浮上している。

### ■産業構造の変化と人口動態

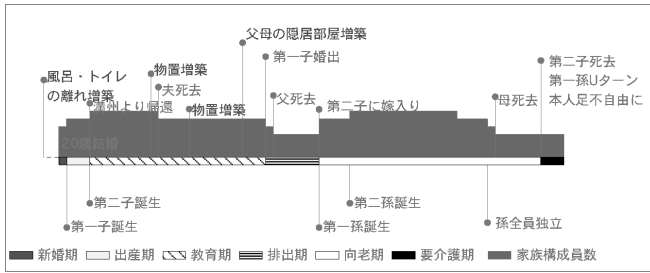
中継港として栄えた大島集落はサービス業を主として発展し、また須江・樫野集落は半農半漁の漁村集落として発展してきた。江戸後期以降増え続けてきた人口・世帯数は明治中期に限界を迎え、長男以外の子供は大阪・神戸などの都市部や中国大陸、さらにはオーストラリアなどへの出稼ぎ移民となり村外へ転出して

いった。終戦直後には諸外国からの引き上げや兵役解除、都市部での食糧難から人口が逆流し、一時的にピークを迎える。この時期には戦中に蓄えられた海洋資源が潤沢にあったため、捕鯨を含めた漁獲量は過去最高を記録し、集落が最も活気づいた。しかし十年後には乱獲のため漁獲高は急激に落ち込み、また大島集落でも船舶が大型化・機械化するにつれ、中継港としての役割は果たせなくなる。紀伊大島から就業場所がなくなると若年・青年層が流出し、過疎・高齢化に歯止めがかからなくなり、現在ではピーク時の半分にまで落ち込んでいる。さらに大島集落/34.6%、須江集落/45.9%、樫野集落/42.2%という高い高齢化率を示している。だが村がひん死の状態にあるわけではない。昭和35年以降40年間、人口が激減しているにも関わらず、世帯数はほとんど横ばいが続いている。イエは全く減っていないということである。なお、漁獲高に関しては昭和35年以降横ばいとなっており漁業自体は安定した状態にあると言ってよい。(図1:人口世帯数動向)



### ■ライフサイクル分析

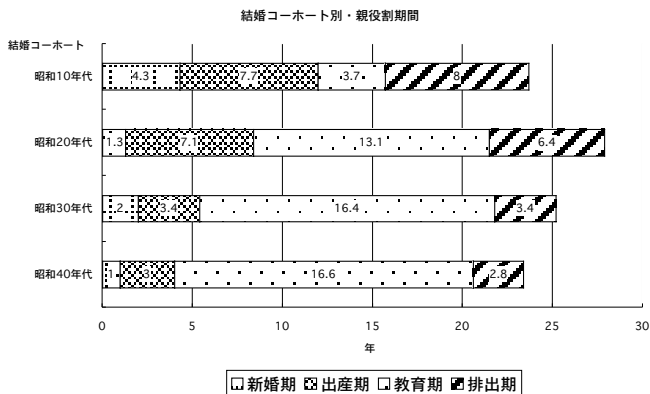
重要な点として、サイクルの段階をどのように設定するのが重要となる。家族社会学の分野では、様々な段階の設定が試みられているが、今回は特に住居との関係、また世代交代を重視するため、世帯構成員数の変化にあわせ以下のように段階を設定した。1:結婚後子供が出来るまでの新婚期、2:末子出産までの出産期、3:第1子結婚までの教育期、4:末子結婚までの排出期、5:介護が必要となるまでの向老期、6:死亡までの要介護期、の6つに分けた。さらにそこに世帯人数の変化、各イベント名称、住居増改築を加え、ライフサイクル表を作成した。



### ■ライフサイクルの変容

(図2：ライフサイクル表)

10年ごとの結婚コーホート別に各段階の平均を取ると以下ようになる。すなわち昭和10年代は出産期・排出期が8年となり、多産であるが子供の結婚・独立も速いため教育期が短く結果的に24年で1サイクルとなっている。昭和20年代は10年代と同じく多産ではあるが、晩婚化のため、教育期が倍増している。昭和30年代コーホートでは晩婚化がすすみ教育期は増えるが少子化が進むため出産期・排出期ともに半減し、結果的に親役割期間は25年サイクルに戻っている。昭和40年代コーホートでもほぼ同じ結果となっており、ライフサイクルは安定期に入ったと言えるだろう。ただし、昭和40年代以降は多様化がすすみ、もはやライフサイクルではとらえられない、さまざまなライフコースが混在した状況となっている。

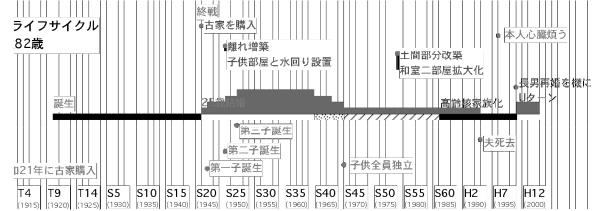


### ■家族の世代交代

次に、生殖家族が直系家族をつくる世代交代のパターンを検証してみる。昭和10年代の結婚コーホートに典型的に見られるのは(図2)のように、向老期に入ると同時に世代交代が行われ、若夫婦の出産期を迎えるというものである。住居のメンテナンスは教育期に親世代の隠居部屋をつくるという形で行われる。(図2)一方、昭和30年代の結婚コーホートではこのような世代交代は全く行われぬ。子供達は長子を含めてほとんど全員村外へ出てしまい、長期化した向老期は夫婦二人で過ごすことが一般的になる。(図3)もうひとつ、この昭和30年代結婚コーホートの特徴として、教育期に子供部屋を確保するために住居を改装

する点が上げられる。この傾向は30年代コーホートから特に顕著であり、少子化が進むと同時に子供室がつくられていることがその原因である。さらに、要介護期を迎えるにあたり風呂・トイレの改修が増え、高齢夫婦家族のみでも出来る限り住み続けるための工夫が行われている。

(図3：昭和30年代結婚コーホートの例)



### ■Uターンによる世代交代

昭和20年代以降の結婚コーホートのライフサイクル表には、世帯構成人数にのピークがひとつしかないことがわかる。孫世代と同居している事例は全くない。これが人口が激減する原因である。しかし大島の世帯数がいっこうに減少していないことからわかるように世代交代がなくなっているわけではない。現在数量的にはまだ少数だが、着実に増えているのは、子供時代を紀伊大島で過ごし、都会で働き定年を迎えた、向老期世代のUターンである。

### ■集落の持続性

退職後Uターンした住民は現在は少数派だが、今後ますます増えることが予想される。ヒアリングで帰村した理由を問えば「祖先の墓を守るため」とはっきりと答える。職場がないという理由から青年壮年が流出していくが、その多くは借家住まいで、定年後大島に家を構えるという可能性は十分に考えられる。集落は長期化した向老期を過ごす場所として特化されていく可能性がある。紀伊大島の集落持続性は、集落が「帰るべき場所」として今後の世代に伝えられていくかどうかにかかっているであろう。現在は幼年期を集落で過ごした人たちが帰っているのだが、その子どもたちの世代、都会で生まれ育ち夏休みを大島で過ごした世代がどれだけ戻ってくるのかにかかっている。老夫婦しか住んでいない、広すぎる住宅をさらに増築している事例が多く見られるが、その多くは、お盆に都会から親族が全員帰ってきて宿泊できるよう増築しているのである。「親族」という概念を持続するために「田舎の家」「祖先の墓」が必要だと言い換えることも出来よう。大島は、「老いを過ごす場所」へと転換しつつあること、人生のある家族周期の中での選ばれるコース選択のひとつにかわりつつあることが重要ではないだろうか。そして盆や夏休みという年周期で「帰る」場所を提供する行為は、集落の今後を左右するという大きな意味がある。

\*1 和歌山大学システム工学部環境システム学科 助手・工修  
 \*2 和歌山大学システム工学部環境システム学科 教授・工修  
 \*3 和歌山大学システム工学部研究科修士課程  
 \*4 和歌山大学システム工学部研究科修士課程

Reserch Assoc., Faculty of Systems Engineering, Wakayama Univ., M. Eng  
 Prof., Faculty of Systems Engineering, Wkayama Univ., M. Eng  
 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.  
 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.